

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol.

06

Issues for Future Development

FEATURE
「発展への課題」

産業能率大学 スポーツマネジメント研究所



SANNO UNIVERSITY

マネジメントの理論と実践を柱に 社会で活躍するビジネスパーソンを育成

産業能率大学は、世の中で実際に役に立つ能力を育成する実学教育を根幹としています。

本学の実学教育は、学問としての経営学の成果を踏まえつつ、

現実のビジネス社会、特にマネジメントに関する現実の問題を学生自身で発見し、

状況の変化に適応して問題解決できる能力の育成を重視しています。

また、コンサルティング機関である総合研究所と連携し、

ビジネスの最新情報や最先端の動向を教育に取り入れるべく企業や団体との提携に取り組むなど、

産業界に最も近い大学として学外とのコラボレーションを積極的に進めています。



CONTENTS

FEATURE「発展への課題」

- 03-06 **01** 乗り越える力を
- 07-08 **02** 求められるより高い意識
— SANNO 女子ビーチバレー部の課題—
- 09-10 **03** SANNO SPORTS EVENTS 2013
- 11-12 **04** SANNOスポーツマネジメントのあゆみ

RESEARCH REPORTS

- 13-14 **05** bj リーグにおける観客調査
— コアブースター育成に関する研究—
- 15-16 **06** 大学とプロスポーツチームのスポーツ連携
— 産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ・
スポーツ教室 新プログラム導入に向けて—
- 17-18 **07** 「ブレイク予想」と「タレント発掘」への挑戦
— スポーツ分野におけるデータマイニングの可能性と課題—
- 19-20 **08** マネジメントの礎を
— 大山登攀競技大会—
- 21 研究員紹介・編集後記



01

乗り越える力を

文責：スポーツマネジメント研究所編集部

昨年、悲願の関東リーグ2部への昇格を掴んだ産業能率大学サッカー部。新たな春季リーグが始まり、これまでとは異なるステージで挑戦の日々を過ごす今、サッカー部の今季の目標は関東リーグ2部残留。次なる課題は一体どこにあるのか、サッカー部のこれまでと、これからの課題を見つめます。

悲願の関東リーグ2部昇格

産業能率大学がサッカーと教育を通じた人材育成の一環として、サッカー強化・人材育成プロジェクトをスタートさせたのが、2006年10月。7年目を迎えた2013年11月、何度も昇格を目前にしながらも叶わなかった関東リーグ2部への昇格の夢を果たすことが出来ました。

遡ること7年前、サッカー部を特別強化クラブとし、育成強化を開始したのが2006年10月。それは、湘南ベルマーレのユースチームに所属する選手の受け入れや、湘南ベルマーレスポーツクラブのコーチ陣の招聘に加え、湘南キャンパス第1・第2グラウンド改修も合わせての発表でした。翌年2月には、湘南ベルマーレの前身であるフジタ工業サッカー部の選手として活躍した坂下博之氏を監督に迎え、産業能率大学サッカー部にとっての“関東リーグ2部昇格”はこの時からの目標でした。坂下監督の下、年々サッカー部員も増え、2年目を迎えた2008年11月に初めて関東大学サッカー大会昇格決定戦に進出しましたが、惜しくも敗退。それから何度と無く

昇格決定戦まで上りつめるも昇格までとどかず、そして、昇格決定戦まで進めない年も2度経験しています。予選リーグを1位で通過しながらも、いざとなると力を発揮しきれていない様子は、観客席からも見て取れました。選手個々の能力は決して低くないという評価を各方面から受けながら、チームとしての団結力や精神面は大きな課題として露呈していました。

「連勝が続くチームの雰囲気も一人ひとりのコンディションもベスト。次の試合は、圧勝できるチームと言えなく無い相手。でもいざとなるとひどい負け方をしてしまう。いけると思う度に自分達の弱さも出てしまった。ただただ考えが甘かったんです。」と語るのは2012年に卒業したOB。卒業までに予選リーグに挑戦する機会が4度あったものの、うち2度は予選リーグを突破することができなかった経験を持つ彼は、「チームのマイナスの雰囲気を払拭するのにどうしたらいいのか。自分たちがチームとしてやらなければならないことが何なのかをもっと真剣に考えられたと思う。」と真剣

な表情で語ってくれました。

2部昇格を目前にしては負け、翌年は予選リーグ敗退を繰り返し、予選リーグ3位という特別強化クラブとしては創部以来最悪の結果で幕を閉じた2012年11月、大きな課題に取り組むべく、産業能率大学サッカー部は動き出しました。それは、かつて湘南ベルマー



2013年11月の昇格入れ替え戦。明海大学との試合は引き分けの末PK戦へもつれこむ展開に。



PK戦を5対4で明海大学に勝利し駆け寄る選手たち

課題を乗り越える力を

加藤監督を迎え、新たなスタートを切った産業能率大学サッカー部。監督就任から約1年余りでの関東リーグ2部昇格までの間、加藤監督が常に学生に問い続けたのは「自分達の現状をよく理解すること」だったと言います。「選手たちの2部に昇格したいという思いを、本当にサッカーに向き合うということがどういうことかを、選手にひたすら話していましたね。」という加藤監督。就任時、2部昇格を望む選手たちの姿を見て、もう一つ足りない何かに向き合うために、自ら目標設定をし、自らトライ・頑張ることの意味を、サッカー以外の場面においても、「物事の捉え方としてどうあるべきなのか」、と何度となく話をされていたと言います。日常の挨拶もその一つ。「挨拶をするなんて当たり前のことですけど、坂下監督がこれまで築いてくれた良い伝統をより意味のあるものにしたくて。」と、サッカーだけではなく人として全ての行動が繋がっているということを何より理解して欲しいという思いは、選手の表情や、課題に取り組む姿勢や行動からも少しずつ意思を持ったコミュニケーションを取れるようになってきているそうです。

選手一人ひとり、そしてチームとしての向上心を垣間見えるようになった今、サッカー部にとっての次なる課題は「自立」。100人居たら、100人の性格とプレイスタイルがあるように、選手としても一人の人間としても自立できるようになることが今の課題。そしてその自立に向けて最も重要なことは、日々の積み重ねと加藤監督は強く語ります。「これをやれば何が出来るようになるとか、そういうことではないんです。日々のトレーニングだったり、1つ1つの毎日の積み重ねが、自分の目標に到達するための近道なんだったという話をしています。」

産業能率大学サッカー部 運営に関する方針

監督 加藤 望

《Trust》

★トラスト

仲間を信頼・信用し、自分を信じ目的に向かい突き進む。
そして仲間からも信頼・信用される行動をとる。

◎産業能率大学サッカー部の目標

- ・大学サッカー日本一。
- ・世界で活躍する選手（人）の育成。
- ・サッカーを通じて人間性をみがく。

◎産業能率大学サッカー部 部員心得

- ・サッカーを本気で楽しむ。
- ・トレーニングから全力でプレーする。
- ・時間厳守。
- ・感謝・謙虚・ひたむきを常に考え行動する。
- ・自己管理をする。(学習、食事、睡眠、健康など)
- ・授業への出席、単位取得、学業とサッカーの両立。
- ・挨拶・身だしなみに気を配る。
- ・連絡、報告を徹底する。
- ・喫煙は禁止。
- ・車・バイクの所有・使用を禁止。
- ・アルバイトは禁止。

◎産業能率大学のサッカーとは

“常にゴールを目指し、自らアクションを起こすサッカー”

◎産業能率大学サッカー部 選考基準

- ・常に考え、全力でプレーできる。
- ・とにかくチャレンジできる。(やってみる)
- ・チームの為に個人の能力を120%発揮できる。
- ・自分にしかできない武器を持っている。
- ・正確に速くプレーできる。



加藤 望

かとう のぞむ

産業能率大学サッカー部監督。東海大学卒業後、日立製作所サッカー部（現 柏レイソル）にて2004年まで活躍。2005年に湘南ベルマーレに移籍、2009年 Jリーグ功労選手賞。2009年より湘南ベルマーレコーチを経て、2013年4月 産業能率大学サッカー部監督に就任。

サッカー部スタッフに 聞きました

3つの質問

- ① 産業能率大学サッカー部の選手が成長したと思うこと
- ② 産業能率大学サッカー部にとって現在の課題を教えてください
- ③ 2014年度のサッカー部、ここに注目して欲しい!

伊藤 友彦

ゴールキーパーコーチ



- ① 本気で楽しむということをやテーマに指導する中で、勝負にこだわって自分達の成長にこだわって取り組まないと結果はなかなか出ないと思うのですが、そういう意味で少し子どもっぽさがあつたのが、産能大のチームとしての一体感も強くなるなかで大人になり始め、結果としても成果が出てきているかなと思います。
- ② 上手く行ったり行かなかったりの連続ですが、僕らスタッフも一緒に成長していかなければいけないところで、彼らに何をどう伝えられるかということに目を向けていかないと、チームとしても個人としても成長していかないと感じています。
- ③ 死に物狂いで必死にやる選手の姿を見てください。目標に向かってとにかく必死です。是非死に物狂いの選手の姿に注目してもらいたいと思います。

山崎 真

コーチ



- ① 純粋な向上心を持っている反面、困難に立ち向かう精神的な強さに課題がありましたが、2013年の春のリーグ戦から浮き沈みを経験しながらも乗り越える力を少しずつ身に付けてくれていると思います。昇格決定戦の前半と後半でも選手の成長を見ることができましたし、少しずつですが成長する姿を見ています。
- ② 関東2部リーグは、今まで見たことも経験したことも無い世界と言えます。連敗が続いて遣り込められている状況ですが、今こそどういう心持でいるかが重要になると思います。
- ③ 選手一人ひとりが試合という表現の場で躍動する姿に是非注目してください。結果は後からついてくると思っています。元気いっぱい、ひたむきな姿を見ることが出来ると思います。

鳥飼 浩之

コーチ

- ① 関東リーグには出場していないBチームの選手を主に担当していますが、声を出してサッカー部の一員として出場選手を応援したりと、サッカー部の一員としての帰属意識がサッカー部全体として強くなってきていると思います。

- ② 1を知って10を知れるようになるかどうかが課題です。成功や失敗、自分の経験を次にどう繋げていくか、あともう一步踏み込んで考えていくことが課題です。そして、良いことは習慣化し、上級生と下級生の関係が上手く巡るように、部としての伝統が自然と築けるようなればと思います。

- ③ レギュラーであるかどうかには係らず、選手一人一人がともエネルギッシュです。



選手がサッカーに夢中になっている姿に注目して欲しいなと思います。

竹野 圭亮

トレーナー

- ① 選手一人一人の目標が具体的になってきたこと。こういうところを強くしたい、怪我をしたくないといった選手の“欲”が具体的に現れてきている今、当然まだまだな部分が多いですが、少しずつ目標に向かって歩めるようにと思います。

- ② 1つのものごとに対して、色んな方法を継続的に考えられるようになってほしいと思います。色んな方法を探し試すのも重要ですが、同じ事を繰り返さないように、どうしたらいいかをじっくり考えられるようになると良いなと思います。

- ③ サッカー部としてチームで戦っていますが、選手一人ひとり個性の有るメンバーばかりです。個性を活かして頑張っている姿を見て頂けたらと思います。



大塚 功太郎

寮監

- ① 選手一人ひとりの規範意識が現れてきたこと。ピッチ外で出来ないことはピッチ内でも出来ませんから、やって当たり前のことは勿論のこと、やれていなかったことや、しなきゃいけないことを、今以上に自分たちでできるようになることを期待しています。

- ② 学年をこえたコミュニケーションを更に強く、視点を変えて物事を捉えられるようになればもっと部としての成長が期待できるんじゃないかなと思います。

- ③ レジリエンス。試合に負け続けたのも創部以来かと思いますが、上手く行かないときこそ今そこを問われていると思います。今の踏ん張りが秋に繋がるとは思いますので見ててください。



大学サッカー日本一を目指して

榊原 大樹

情報マネジメント学部 2013年度卒業 サッカー部 OB・主将

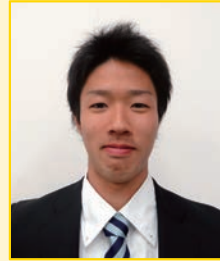


昨年、ようやく関東リーグ2部に昇格できましたが、サッカー部にとっては初めての関東リーグとなります。これまで関東リーグでの経験が無いため、真剣勝負における格上相手との対戦経験の少なさは、これから始まるリーグ戦でも課題となるのではないのでしょうか。しかし、加藤監督をはじめ、スタッフも選手と共に戦ってくれていますので、怯むことなく、試合に臨んでももらいたいと思います。そして、近い将来大学サッカー日本一を掴み取れるよう、サッカー部メンバー丸となって活躍してもらいたいと思います！

チームの雰囲気更に向上するように

楠元 秀真

情報マネジメント学部4年 2014年サッカー部主将



1年生から4年生まで、選手一人ひとりの目標がそれぞれ異なる状況の中で、全員が同じ方向を向いてプレーできるかどうか課題だと思っています。個々のプレーが良くてもサッカーはチームスポーツなので、チームの雰囲気が向上できるよう主将としても気を配りたいです。サッカーはもちろんのこと、そうでない場面においても上級生が下級生を自然と指導できるようなチーム作りが今の目標です。日常の色々な場面での気付きをお互いに気付き合えるようになれば、更に強いチームになれるのではないかと、自分も主将として一選手として向上したいと思います。

うまくいかないのが当たり前の中で

悲願の関東リーグ2部昇格も、長くは喜びに浸ってられません。2014年の春季リーグがいよいよスタートしましたが、本学サッカー部は初戦より第5節まで1分4敗。初めて経験する関東リーグ2部は、「レベルが1ランク上がったなんていう甘いものではなく、それは2つ3つ上のレベル。そう簡単には勝てない。」と監督をはじめスタッフは口を揃えます。勝負の世界で生きていくうえで、この壁をどう乗り越えるかが、これからの課題となりますが、加藤監督は「サッカーは『うまくいかないのが当たり前』のスポーツ」ですから。そこでどう踏ん張るのか、何が課題なのか。本当にじっくりと考えなければいけない。まだまだ成長の途中ですが、顔は前を向いています。」とチームの雰囲気を語ります。

複雑な条件下、試合の瞬間瞬間で選手一人ひとりの即興的なベストが求められるサッカーにとって、選手が経験から何をどう学ぶかは選手、そしてチームにとっての最も重要な課題と言えるでしょう。ただ、これは何もサッカーだけの問題ではなく、少し視点を変えれば、私たち一個人が仕事や生活、そして趣味の場面であっても、より高みを目指す上では共通の課題です。そしてそれは、一個人の生き方を象徴する考えや振る舞いにも通じることは想像に難しくありません。「ピッチの外で出来ないことは、ピッチの中で出来ませんから。それに、その逆も当然のことです。どれだけ真剣に向き合えるか、最後は一人ひとりの生き方の問題にもなると思うんです。」加藤監督の言葉は、スタッフ全員が口にしていたことでもあります。が、浮き沈みを繰り返す「まだまだ」な状況の中でも「必死に向き

合う」という土台が整いつつあるのでしょう。生き活きた表情でボールを追い、キャンパス内でも活気のある選手たちの姿は、その昔の様子とはずいぶん変化したのではないのでしょうか。

とは言え、関東リーグ2部の大きな壁に立ち向かい必死な状況下、産業能率大学サッカー部が本当に目指す目標は、「大学サッカー日本一」。まだまだ通過点の関東リーグ2部で、どれだけ困難に立ち向かい、乗り越えられるのか。産業能率大学サッカー部の本当の戦いがようやくスタートを切りました。



部員数は110名に。「Trust」をチームコンセプトに「大学サッカー日本一」を目指します。

求められるより高い意識

— SANNO 女子ビーチバレー部の課題 —

文責：小野田 哲弥

2013年9月、2020年の夏季オリンピック・パラリンピックの開催都市が東京に決まった。産業能率大学女子ビーチバレー部が実質的な活動を開始したのは2008年である。2014年はそれから6年後、また2020年の東京五輪開催まであと6年という折り返し地点にある。

次ページの表にあるように、本学的女子ビーチバレー部は目覚ましい発展を遂げている。日本最高峰のビーチバレーツアーであったJVBツアーのMVP(最優秀選手)を、溝江明香(2011年)・石田アンジェラ(2013年)と2選手も輩出、さらに高校時代のユース日本代表経験者を新入部員に迎え、年々選手層も厚みを増している。ビーチバレーコート開設記念式典の挨拶で日本ビーチバレー連盟の川合俊一会長が「ビーチバレーといえば産業能率大学と言われるようになってほしい」と語ったが、その期待に着実に近づいている。

しかしながら「五輪でメダル獲得」という究極の目標に向けては、道まだ半ばである。2014年4月に本学を卒業した石田アンジェラと残された3・4年生の部員たち、そして日々指導に当たる川合庶ヘッドコーチに更なる発展のための課題を聞いた。

完全燃焼の4年間

「ビーチバレーは引退して、アメリカに渡って新たな夢にチャレンジします」その発言に最初は耳を疑った。しかし石田選手の話を直接聴けば、きっと多くの人が納得できるに違いない。それほどまでに彼女の4年間は密度が濃く、また達成感の大きなものであったからだ。

1学年上の溝江明香選手(現アットホーム)とは違い、石田は「オリンピック出場」という大きな目標を抱えて入学したわけではない。「ビーチバレーを好きになるところから始めました」と本人が語るように、恵まれた身長(185cm)によってスカウトされ、その負担に応えるべく活動を開始したに過ぎない。

しかし練習に取り組む石田の真摯な姿勢は、予想を上回る勢いで彼女自身を成長させた。そして2013年5月に最高潮を迎える。日本のトッププロが集うJVBツアー第1戦において優勝、日本一の称号を手にしたのだ。その瞬間、文字通り彼女は燃え尽きた。「もう十分やった。これ以上望むものは何もない」JVBツアーでの優勝がそれ一度きりなのは、モチベーションの低下が最大の理由だったと語ってくれた。

後輩に寄せる期待

初心者から日本女子の頂点にまで登り詰めた石田だが、日本代表として世界を転戦するわずか数年の間だけでも海外選手には驚かされることが多かったという。それは自分より背が低く技術も劣る選手が、次に会った時には自分よりもはるかに強くなっていることが珍しくなかったからだ。その要因を彼女は、練習に対する意識の違いだと分析する。

砂浜に多くのネットが林立し、ビーチバレー人口が多い諸外国に比べ、日本が環境的に不利なのは否定しがたい事実である。だがその一方で、自ら練習や遠征の費用を稼がなければならない国内プロ

選手に比べ、いかにSANNO女子ビーチバレー部が恵まれているか、その自覚が足りないと嘆く。世界と戦って勝ち、自分たちの力で国民全体の注目を呼び込むくらいの意気込みを、SANNOの後輩たちには持ってほしいようだ。

世界を知り、また後輩たちのポテンシャルに期待を寄せる石田だからこそ、練習の一分一秒を無駄にせず、一挙手一投足にまで集中力を高めれば、彼女が驚嘆させられた海外選手同様に、後輩たちも自分を超えてくれるという確信があるに違いない。

慢心を戒め、伝統を引き継ぐ

溝江選手の同期には、学生にして初めて日本ビーチバレー連盟公認大会「2011ビーチバレー SANNO オープン」の大会運営責任者を務めた中村彩羅がいた。その伝統を受け継ぐのが2013年度部長を務めた村田である。卒業後は一般企業への就職を目指す彼女は、その裏方の経験を「部員全員が一致団結できる貴重な機会で、ビーチバレー以外にも活きる」と語ってくれた。

他方現3年生の3人は、いずれもユースの日本代表経験があり、溝江・石田の系譜を継ぐ選手たちである。新部長となった清水は「ビーチバレーは自由な競技で、先輩から強制的に教えることはないが」と断った上で「挨拶だけはきちんとできるように徹底したい」と反省を口にした。そこには女子ビーチバレー界の中心を担う自分たちの驕りへの戒めが含まれている。

2014年度の部員数は過去最大の10名を数える。彼女たちの意識は、純粋な体育会として自身を研鑽したいレベルのものからオリンピック出場を目指すレベルまで幅広い。鈴木は「意識の違いによって練習を分けることも必要」と訴え、中丸もその意見に賛同する。東京オリンピックまであと6年。その舞台に立つことを夢見る彼女たちの眼差しが、いよいよ真剣みを帯びてきた。

コーチを困らせるくらいの熱意を

本学において2人のJBV ツアーアワード MVP 選手を育て上げた川合庶ヘッドコーチだが、現状に満足することなく、2014年度に2つの大きな目標を掲げている。

一つは突出した選手の発掘である。もちろん、現3年の清水・鈴木・中丸も世界と戦える可能性を秘めているが、石田並みの身長でなおかつビーチバレーが天職のような若い選手が現れれば、今いる選手たちの闘志に火を点け、相乗効果が期待できると説く。

そしてもう一つは、そのような外発的な刺激がなくとも彼女たちの意識が変わることだ。それは上述の石田が在校生に残したメッセージにも重なる。片言の英語で海外を転戦したサバイバルな経験を持つ川合コーチには、ポイントを稼ぐ手段を自ら見つけて遠征し、自分を最も成長させてくれる相手とペアを組み、日頃の練習にも自ら目標設定をして取り組むという自立なくして、一人前のビーチバレーボール選手ではないという意識が強い。もしそういった意識の高い選手に求められるなら、自分が費やす時間と労力は惜しまないが、まだその域に達する選手が部員の中から出てこないのが不満だという。

「俺をもっと困らせてくれ」川合コーチのこの口癖が収まる時こそ、SANNO 女子ビーチバレー部が真に成熟し、同時に日本のビーチバレーが世界に伍して戦える時代の幕開けなのかもしれない。



石田 アンジェラ

産業能率大学情報マネジメント学部2013年度卒業生

いしだ・あんじえら

2014年3月、本学を卒業。1年次(2010年)に日本バレーボール協会ビーチバレー強化指定選手に選ばれ、2年次(2011年)にはFIVB ビーチバレージュニア世界選手権で9位。3年次(2012年)にはアジアユニバーシアード大会で準優勝、全日本ビーチバレー大学選手権で優勝。4年次(2013年)にはJBV ツアー東京大会で優勝し、年間最優秀選手(MVP)に輝く。



村田 茉耶

産業能率大学情報マネジメント学部4年

むらた・まや

私立奈良女子高校出身。2年次(2012年)にビーチバレーカレッジオープン準優勝、関東大学ビーチバレー選手権大会準優勝。3年次(2013年)には部長として、日本ビーチバレー連盟公認大会「ビーチバレー SANNO オープン2013」の運営責任者を務め、大会を成功させる。



清水 友菜

産業能率大学情報マネジメント学部3年

しみず・ともな

東京都私立駿台学園高校出身。1年次(2012年)に関東大学ビーチバレー選手権大会3位、2年次(2013年)に全日本ビーチバレー大学男女選手権大会女子の部で準優勝。3年次(2014年)は新部長として部員を統率するとともに、U-21日本代表としても活躍が期待される。



鈴木 千代

産業能率大学情報マネジメント学部3年

すずき・ちよ

東京都私立共栄学園高校出身。高校3年次(2011年)に石田と組みFIVB ビーチバレージュニア世界選手権で9位。大学1年次(2012年)にビーチバレーカレッジオープン優勝、大学2年次(2013年)にU-21日本代表としてAVC ビーチバレーアジア選手権大会銀メダル。



中丸 千晶

産業能率大学情報マネジメント学部3年

なかまる・ちあき

神奈川県立大和南高校出身。1年次(2012年)に関東大学ビーチバレー選手権大会3位、2年次(2013年)にU-21日本代表としてAVC ビーチバレーアジア選手権大会5位、全日本ビーチバレー大学男女選手権大会女子の部で準優勝。

産業能率大学 女子ビーチバレー部 年表

年	月	選手・ペア ※敬称略。本学学生は()内の数字は当時の学年。	戦績・できごと
2007	10	—	産業能率大学女子ビーチバレー部発足
2008	4	—	ビーチバレーコート開設記念式典(ビーチバレー連盟・川合俊一会長、国内1・2位の楠原千秋・佐伯美香ペア、田中姿子・小泉栄子ペア来校)
2009	8	満江明香(1)・大原愛加(1)	第21回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会準優勝
	9	満江明香(1)・藤井桜子(日本体育大学) 中村彩羅(1)・本間江梨(日本大学)	FIVB ビーチバレージュニア世界選手権大会出場 新潟国体において茨城県代表として5位入賞
	11	—	本学ビーチバレーコートにおいて近隣小学生を招待した「ビーチバレーフェスタ2009」を開催。以降恒例行事に
2010	5	満江明香(2)・石田アンジェラ(1)	平成22年度日本バレーボール協会ビーチバレー強化指定選手に選出
	8	大原愛加(2)・中村彩羅(2)	第22回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会準優勝
		満江明香(2)・田中姿子(エコ計画)	第16回アジア競技大会で5位タイ
	11	満江明香(2)・田中姿子(エコ計画) 満江明香(2)	JBV ツアーアワード2010 グランドチャンピオン JBV ツアーアワード2010 新人賞
2011	7	小林優香(3)・石田アンジェラ(2)	関東大学ビーチバレー選手権大会優勝
	8	石田アンジェラ(2)・鈴木千代(共栄学園高校)	第26回ユニバーシアード競技大会出場 FIVB ビーチバレージュニア世界選手権大会9位
		満江明香(3)・田中姿子(エコ計画) 満江明香(3)	JBV ツアーアワード2011 グランドチャンピオン JBV ツアーアワード2011 MVP
	12	—	本学ビーチバレーコートにおいて日本ビーチバレー連盟公認大会「2011 ビーチバレー SANNO オープン」を開催。大会運営責任者は中村彩羅(3)
2012	5	石田アンジェラ(3)・駒田順子(ポイント)	JBV サテライト胸ヶ根大会優勝
		中村彩羅(4)・鈴木千代(1)	ビーチバレーカレッジオープン2012 優勝
	6	小林優香(4)・村田茉耶(2)	ビーチバレーカレッジオープン2012 準優勝
		満江明香(4)・田中姿子(フリー)	ロンドン五輪アジア大陸予選5位でオリンピック出場ならず
		中村彩羅(4)・石田アンジェラ(3)	関東大学ビーチバレー選手権大会優勝
	7	村田茉耶(2)・鈴木千代(1)	関東大学ビーチバレー選手権大会準優勝
		清水友菜(1)・中丸千晶(1)	関東大学ビーチバレー選手権大会3位
		中村彩羅(4)・石田アンジェラ(3)	第24回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会優勝
	8	満江明香(4)・田中姿子(フリー) 満江明香(4)・田中姿子(フリー)	第26回ビーチバレージャパン優勝 第23回全日本ビーチバレー女子選手権大会優勝
	9	満江明香(4)・永田唯(鹿屋体育大学) 石田アンジェラ(3)・鈴木千代(1)	第6回ビーチバレー大学選手権大会13位タイ 第6回ビーチバレー大学選手権大会17位タイ
	10	—	「ビーチバレーフェスタ」を「ビーチバレー SANNO CUP」に改称
2013	11	満江明香(4)・石田アンジェラ(3)	第2回アジア大学ビーチバレー選手権大会準優勝
		鈴木千代(2)・浦田景子(フリー)	AVC アジアツアー インドネシア大会3位
	4	石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー) 石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー)	AVC アジアツアー インドネシア大会5位タイ AVC アジアツアー ベトナム大会5位タイ
		鈴木千代(2)・浦田景子(フリー)	AVC アジアツアー ベトナム大会7位タイ
		石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー)	JBV ツアー第1戦 ビーチバレー東京オープン優勝
		鈴木千代(2)・浦田景子(フリー)	JBV ツアー第1戦 ビーチバレー東京オープン優勝
	5	鈴木千代(2)・石坪聖野(福知山成美高校) 中丸千晶(2)・仲田莉葉(1) 石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー)	AVC ビーチバレーアジア選手権大会(U-21)準優勝 AVC ビーチバレーアジア選手権大会(U-21)5位 JBV ツアー第2戦 ビーチバレー福岡オープン準優勝
	6	鈴木千代(2)・石坪聖野(福知山成美高校)	FIVB ビーチバレーボール世界選手権(U-21)17位タイ
	7	清水友菜(2)・中丸千晶(2) 石田アンジェラ(4)・満江明香(アットホーム)	関東大学ビーチバレー選手権大会優勝 第27回ユニバーシアード競技大会17位タイ
	8	清水友菜(2)・中丸千晶(2)	第25回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会準優勝
	9	石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー) 石田アンジェラ(4)・大山未希(フリー)	JBV ツアー第3戦 第14回ビーチバレー霧島酒造オープン3位 東京国体において東京都代表として優勝
	10	石田アンジェラ(4)・田中姿子(フリー)	JBV ツアー第4戦 ペボニアカップ準優勝
	11	鈴木千代(2)・中丸千晶(2)	湘南ベルマーレカップ JBV サテライト平塚大会5位タイ
	12	石田アンジェラ(4)	JBV ツアーアワード2013 MVP(最優秀選手賞)

川合 庶

産業能率大学女子ビーチバレー部ヘッドコーチ

かわい・ちかし

1965年生まれ。兄・川合俊一氏とともに日本のビーチバレー界を牽引してきた先駆者の一人。ビーチバレー選手として、1993年FIVB(国際バレーボール連盟)アジアサーキット優勝、1999年ビーチバレージャパン準優勝などの成績を残し、2001年に現役を引退。湘南ベルマーレビーチバレーチームのゼネラルマネージャーのほか、日本バレーボール協会ビーチバレー強化委員会副委員長などを歴任し、後進の育成にあたる。2007年より現職。



多くの人たちに、ビーチバレーをやってもらいたい、見てもらいたい。今年も学生たちの熱い思いが、「SANNO CUP」と「SANNO オープン」を通じて湘南キャンパスのビーチバレーコートに注がれました。



SANNO CUP の今年のテーマは 「大会規模の拡大」と「大会レベルの向上」

2013年10月13日に開催されたのは、小学生のビーチバレー大会である「SANNO CUP 2013」。ビーチバレーの普及を目的として始まった前身の「SANNO ビーチバレーフェスタ」から数えると、通算で5回目の開催となります。今年も、情報マネジメント学部開講の「イベントプロデュース」の履修学生30名が日刊スポーツ新聞社と協働のもと、一致団結して大会の企画・運営を行いました。

当日は、神奈川県平塚地域小学生バレーボール連盟に加え、同じ県下の藤沢地域小学生バレーボール連盟と東京都町田市少年少女バレーボール協会からも参加チームが加わり、参加選手が280名を超える大規模な大会となりました。また、本学からの提案を株式会社ミカサが受け入れ、小学生用ビーチバレーボールを初製作し、大会使用球としました。

大会では、準決勝に3地域からのチームが進出し、接戦の末、バレーボールの関東王者である平塚地域の緑台 VBC が栄冠に輝きました。また、タイトなタイムスケジュールの中、半年間かけて準備した大会を成功させようと一生懸命に活動する学生達の姿に、多く

03

SANNO SPORTS EVENTS 2013

もっと子供にバスケットボールに親んでもらいたい。こうした理想の下bjリーグでは、キッズ・バスケットボール体験会を主催しています。産業能率大学では、学生有志がボランティアとしてイベントに参加しました。



子供たちにバスケット

2013年12月から14年3月まで、4回にわたってキッズ（6歳以下）対象のバスケットボール体験会が平塚総合体育館にて開催されました。この体験会はプロバスケットボール・



リーグのbjリーグアカデミーが主催するもので、子供の頃からバスケットボールに触れ、その面白さを知ってもらおうというものです。今回行われたのは、平塚を中心とした湘央地区の子供たちを対象にしたもので、産業能率大学からは、情報マネジメント学部と経営学部から10名の学生がボランティアとしてこの活動に参加しました。いずれの回も盛況でしたが、多いときには約50名の子供が集まり、その子供たちのご両親を合わせると150名くらいの規模となるイベントになりました。

の賞賛を頂きました。更には、この大会の様子を学生が取材し、日刊スポーツ新聞の1ページ分にまとめた記事が掲載され、多くの反響を頂きました。

大会終了後の反省会では、競技ルールの検討や円滑な大会運営、そして大会の効果的なプロモーションなどの課題が挙げられました。これらの課題は、2014年度の履修学生に引き継がれ、一歩一歩ですが、学生によるビーチバレーの普及を進めています。

2014年の「SANNO CUP」は10月18日（土）開催予定。是非ともご来場下さい。

SANNO オープン～日本で唯一の学生が企画・運営するビーチバレー公認大会～

SANNO CUPの余韻も消えぬ2013年10月19日に、日本ビーチバレー連盟公認大会である「SANNO オープン 2013」が、本学女子ビーチバレー部主催（本学後援会（父母会）後援）により開催されました。この大会は、ビーチバレー部員が選手として参加するだけではなく、本学にて学んだスポーツマネジメントの知識を活かし、自らが大会をプロデュースし運営するという特色ある大会です。

この大会は、選手たちの試合参加の機会を増やし、ビーチバレー競技の普及を目指すこと、さらには地元の小学生バレーボール選手を招待して、ビーチバレーをやって、見てもらい、地域に密着してビーチバレーの裾野を広げることを目的としています。

当日は8チーム、16名の選手が大会に参加し、熱戦を繰り広げました。また、決勝戦を伊勢原市と平塚市のバレーボールチームに所属する53名の小学生が観戦しました。ビーチバレーの試合を目前で見るのが初めての子供たちが多かったと思いますが、よいプレイが出たときには拍手が沸いていました。大会終了後には、選手と小学生が試合を行ったり、レクリエーションゲームを通じて交流をしたりする機会を設けました。選手と一緒に素足でコートを走る様子から、ビーチバレーを楽しんでもらえたように感じました。

今回で2回目を終えた SANNO オープンですが、大会をやり遂げた部員達は、プレイ以外での自分の可能性に自信を深められたようです。また、大会参加者や観戦者を増やすため、いかにして選手や地域住民に対して大会開催のプロモーションを行い、大会の価値を高めるのか。そして、競技者と運営者の二足のわらじを履くが故の、大会運営の細かな点への配慮の不十分さをどのようにして補うのかという大会発展のための課題に、学生たちは気づいているようです。

“スポーツの楽しさを知ってもらいたい”という学生の思いは、イベントを通じて少しずつ実りあるものになりつつあるようです。2013年に5回目を迎えた「SANNO CUP」は300名近い小学生が参加し、「SANNO オープン」では小さな子どもたちが目を輝かせて、プロのビーチバレーツアーに参戦する大学生選手の試合を観戦していました。回を重ねる度にイベントの規模が広がりつつありますが、今年初めての試みとなるのが「キッズ・バスケットボール体験会」。イベントの企画・運営は自分たちが思っている以上に思う通りにはいきませんが、スポーツに夢中になる子どもたちの姿と笑顔は、学生にとって大きな糧となっています。

体験会の内容

体験会は約2時間のプログラムが組まれており、まず少し年齢が上で、すでに少し練習している子供たちの模擬試合の見学から始まります。自分と同じような背格好の子供が、ドリブルで走り抜け、シュートを放つ姿を見て、体験会に参加したキッズたちとそのご両親も感心して観戦していました。模擬試合が終わると、bjアカデミーのコーチによる準備運動を含めた体操の指導が行われます。この体操は親子で協力して行うもので、簡単なものは家でもできるものです。親子そろってストレッチやボールを使った運動、そしてシュートなどの練習へと続き、2時間はあっという間に終わります。

ボランティアの活動

さて、本学学生のボランティアの活動はというと、体験会の最中は専ら、キッズたちの運動が安全に行われるようにサポートすることが第一の仕事となります。また、自らも同じ運動をすることで、お手本としての役割を担っていました。しかし、ボランティアの大変な部分はこの体験会の前後にあります。朝早く集まって、会場の

設営やゴールの組み立てなど参加者を受け入れる準備を行い、親子が帰った後は、撤収作業があります。最初は慣れない手つきで作業を進めることとなりますが、これは回数を重ねて覚えていくしかありません。後で聞いてみると、子供たちが元気に運動しているのが可愛くて、見ていて楽しかったという感想が多く聞かれました。



今後の展開

今回のようなキッズ・バスケットボールの体験会は、今後も地域を広げて行われる予定になっています。学生もボランティアを通じて、楽しみながら学ぶことが多かったようでした。今回はイベントというかたちでメンバー参加を募りましたが、今後もこうした活動を継続してサポートしていくためには、組織的な体制づくりが必要になってきます。学生の希望をききながら、本学では今後もこの事業に積極的に携わっていきたいと考えています。



産業能率大学は、湘南ベルマーレ・横浜 DeNA ベイスターズ・横浜ビー・コルセアーズと提携関係を結び、情報マネジメント学部の授業科目の共同開発や研究活動を行ない、大学の行事や活動への協力など、数々の取り組みを展開してきました。本学のスポーツマネジメントの今日までの取り組みについて紹介します。



※選手の所属・肩書き・チーム名は当時のものとなります。

産業能率大学スポーツマネジメント研究所では、bjリーグの横浜ビー・コルセアーズとのコラボレーション活動を通じ、2011-12シーズンから観客調査を実施している。これまでも本誌においてその一部を紹介してきたが、今回は様々な調査内容及び調査結果の概要について詳しく紹介する。

バスケットボールのような室内型のスポーツでは、観客は多いことにこした事は無いが、野球やサッカーのように一試合で何万人もの観客を集める必要はない。重要なのは、3000人規模の観客をいかに継続的、安定的に集め続けるかという点である。そこで、本研究では、将来の発展を見据え、3年～5年後をめどに、安定した観客数を確保するために一定以上のコアブースターを育成し、シーズン中に何度も試合会場に足を運んでくれるリピーターを育てることを第一の目的として設定した。コアブースターは自身が熱烈に応援するだけでなく、他の人たちにバスケットボールの魅力を伝えてくれる伝道師にもなる。そうしたコアなファンを育成する為には何が効果的な施策となるのか、そのヒントを得る事を目的として調査を実施した。

調査概要

1) 目的

コアとなるブースターを育成し、安定した観客数を確保するために、これまで会場に足を運んでくれた観客のニーズを捉え、様々な改善を図ることを通じて顧客満足度を向上させ、会場（アリーナ）の観客を常に一定水準以上保持することを目的とする。

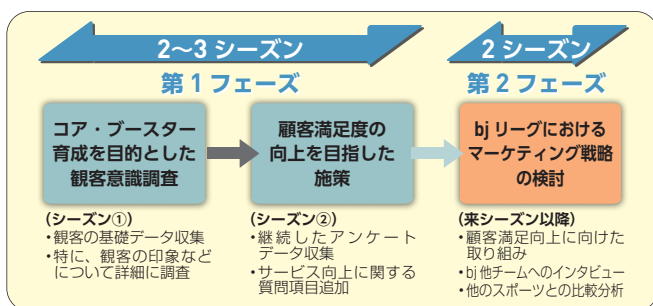


図1. 調査のフレームワーク

2) 実施内容

調査対象：横浜ビー・コルセアーズのホームゲーム（横浜を中心とした神奈川県内で開催）に来場していた観客

調査方法：調査用紙を配布し、観客自ら記入してもらい、その場で回収

調査期間：2013年10月～2014年4月（18試合）

調査場所：横浜国際プール、横浜文化体育館、平塚総合体育館、スカイアリーナ座間、小田原総合体育館など

主な調査項目：

- ①顧客属性（性別、年代、自宅所在地及び自宅から会場までの所要時間、等）
- ②試合観戦に関する調査（観戦回数試合のスタイル、チケットの

購入しやすさ、等）

③試合内容に関する調査（試合スタイル、好きな選手、ショーの魅力度 等）

④グッズ及びフーズに対する要望に関する調査（グッズの種類、フーズの種類 等）

調査結果

ホームゲームでのアンケート調査（対面式）で得られた有効回答数は518であった。アンケートは、複数回答する人が出ないように、調査時に確認を行った。以下、①顧客属性、②試合観戦に関連する調査、③試合内容に関する調査、④グッズ及びフーズに関する要望についての調査といった4つの観点から、その結果概要を紹介する。

①顧客属性に関するデータ

顧客属性については、「性別」「年代」「自宅所在地」「自宅からの所要時間」などについて聞いた。「性別」では、男性が59%、女性が41%となっており、男性の方がやや多い。しかし、野球やサッカーなどと比べてもその差は大きくない。より詳細な調査が必要であるが、バスケットボールは比較的女性の関心が高いスポーツである可能性がある。「年代」では、10代が32%と最も多くなっており、20代が17%、30代が23%、40代が22%となっている。想像されたことではあるが、野球などに比べると年配の方の観客が極端に少ない。試合の期日や時間を考慮すると、今後は団塊の世代などの年配層を取り込む努力が必要になってくるかもしれない。「自宅所在地」については当然のことながら「神奈川」が圧倒的に多く86%を占めている。地元密着型のチームを志向しているのであれば、これは容認できる数値であろう。最後に「自宅からの所要時間」について聞いた。これは会場へのアクセスを調査する目的で聞いたものである。会場へのアクセスについては、他のスポーツにおいても観客の要望や不満が多いことがわかっている。今回チームも様々な開催地で試合を行ったが、平均を見ると1時間以内が全体の80%を占めていることがわかった。

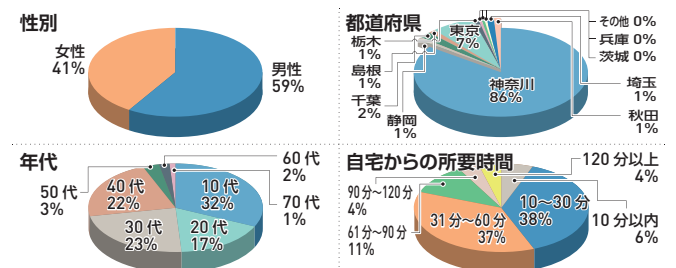


図2. 顧客属性に関するデータ群

②試合観戦に関する調査

次に、試合観戦に関する設問としては、まず「観戦回数」について聞いた。初めてと回答した人が56%、一度観戦したことがある人が26%と、1、2回目が全体の約80%を占める。この3年間くらいは、初めて見たという人を増やしたい時期でもあり、これは妥

当な数値といえる。しかし、今後はこの層をリピーターにしていかななくてはならない。この点については定性データの分析を踏まえながら、詳細な検討が必要となる。「どなたと」観戦に来たかについては、友人という回答が最も多く45%、次いで家族が37%であり、この2つで80%以上を占めている。「会場が便利か」という問に関しては、「そう思う」が62%と過半数を超えている。前述の自宅からの所要時間と合わせて考えても、会場には大きな不満はないと考えてよい。このセクション最後の設問は「チケットの購入しやすさ」であるが、購入しやすいが52%とはなっているものの、半数はやや不満を持っていることが伺える。チームでは、コンビニなどでのチケット購入や、試合会場での販売など工夫を凝らしてはいるものの、まだ告知が不足している感否めない。実際に追加調査で、現場でチケットを購入している方にインタビューを行ってみても、事前にチケットを手に入れるやり方がわからない、という意見が複数聞かれた。よりわかりやすく、思いついたときにエントリーしやすい工夫が必要なのかも知れない。

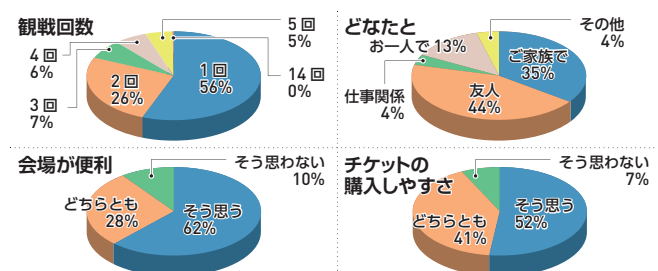


図3. 試合観戦に関するデータ群

③ 試合内容に関する調査

試合観戦に対する調査と関連して、試合内容についてもいくつか聞いている。これはコンテンツとしての試合の魅力度向上を図る為に聞いているもので、主に演出やチームの魅力に関する点について調査した。まず「試合のスタイル」については、「気に入っている」が47%だが、「どちらとも言えない」も50%と多い。試合のスタイルは、バスケットは主に戦術面においてHC（ヘッドコーチ）のカラーが色濃く反映されるものである。横浜は、bjリーグでもトップクラスの守備を誇るチームであり、そのスタイルがまだ深くは浸透していないのかも知れない。以下、「好きな選手がいる」と「好きな演出がある」といった2つの設問においては、いずれも「そう思う」と「どちらとも言えない」が半々くらいの結果となった。これはコンテンツとしての特色が希薄であることを示している。コアブースターを育成していく為には、この数値を高めるために、よりファンとの交流を高める工夫をしたり、ファンが横浜を育てるという実感をもたせることが出来るような工夫が求められている。一点、「ショーの魅力度」に関しては、若干ではあるが肯定的な意見が多い（57%）。これはチアのB-ROSEへの評価が比較的高いことを示していると捉えることが出来る。

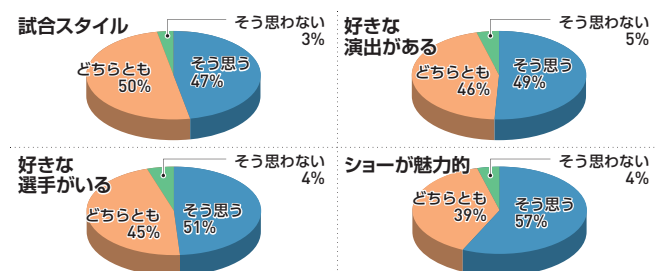


図4. 試合内容に関するデータ群

④ グッズ及びフードに関する質問について

最後に、会場で販売しているグッズやフードに関する満足度についての調査結果である。グッズやフードの売上は、チームの人気のバロメーターであると同時に、試合観戦を盛り上げるアイテムとなったり、チームのカラーを観客にアピールする重要な機会でもある。まずグッズについては、種類、価格に関する調査結果を見ると、残念ながら「どちらとも言えない」が最も多い。追加のインタビュー調査では「B-CRAP」という応援グッズの評価が高いことがわかったが、実際に会場に来ている10代、20代の若年層には、魅力的なグッズであってもやや価格が高めで購入しにくいかもしれない。フードに関しては、いずれの質問においても「どちらとも言えない」が最も多く、決して満足していない観客の姿が浮かび上がる。現実の問題としては、会場によっては様々な規制があり、自由な販売が難しいようであるが、野球などの他のスポーツや海外のスポーツを見ると、選手が携ったグッズやフードの販売や、名物となっている食べ物（その会場でしか食べられない等）の販売、選手との記念撮影のクジが入っているものなど、まだまだ工夫の余地はある。こうした点の強化については、観客満足度に強く影響を与える可能性があるものなので、根本的な取り組みの見直しが必要となろう。

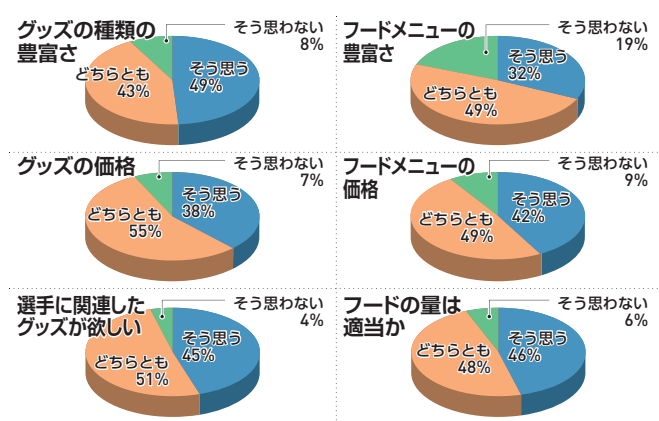


図5. グッズ及びフードについてのデータ群

今後の課題と展望

さて今回、本稿では、昨シーズン実施したアンケート調査の結果について、その詳細を紹介した。次々と新規のスポーツが生まれ、新しいエンターテインメントが開発される厳しい観客獲得競争の中で、バスケットボールが生き残っていく為には、今観戦してくれている観客を橋頭堡として、観客との長期的で良好な関係性を構築していくことが求められている。たった2、3年シーズンの調査で結論を出すことは難しいが、継続した調査を実施し、即効性のある施策を模索する一方で、1つ1つ観客の要望にこたえつつ、観客との確固とした長期的な関係性を構築していく事が、10年後のプロバスケットの将来をつくっていくものと思われる。

今後の課題としては、こうしたアンケート調査を継続させつつ、この結果をチームにフィードバックして、それを少しでも施策に活かしていくことが求められている。また調査としては、継続して同じデータを取っているものも多いので、ある程度データが蓄積されてきた段階で、時系列の変化という視点からの分析を行ってみるべきであると考えている。いずれにしても、この中長期的なコラボレーションの中で、チームと協力しながら、バスケットボールというコンテンツの魅力を向上させ、ビジネスモデルの構築に資する研究を継続していきたいと考えている。

大学とプロスポーツチームのスポーツ連携

—産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ・スポーツ教室 新プログラム導入に向けて—

情報マネジメント学部 教授 中川 直樹 / 情報マネジメント学部 教授 渡邊 隆嗣

大学とプロスポーツチームの連携によるスポーツ教室

「産業能率大学 collaboration with 湘南ベルマーレ スポーツ教室」（以下、スポーツ教室と略す）は、本学の持つスポーツ施設と湘南ベルマーレの有する指導者や指導ノウハウを活用して、伊勢原市や平塚市を中心とした地域のスポーツ振興に貢献する目的で2008年から開始された。

スポーツ教室は、NPO 法人湘南ベルマーレスポーツクラブにて当時取り組んでいた種目であるサッカー、ビーチバレー（バレーボール）、ソフトボール、トライアスロン（健康づくり）を中心として、4月を除いた毎月1回、年間で11回開催されている。スポーツ教室への参加者は、湘南ベルマーレや競技団体等からの勧誘を受けたチームの小学生が大半を占め、個人参加者は少ない（ただし、健康づくり教室は中高齢者の個人参加が中心）。また、当日のプログラムは、ウォーミングアップから始まり、基本の動作・プレーを確認した後、ミニゲームを行い終了するという内容である（健康づくり教室には、講義も加わる）。

スポーツ教室は立ち上げから順調に回数を重ね、2013年度には参加者の合計が500名を超える規模となった。しかし、この6年の間に、スポーツ教室参加者アンケートや伊勢原市スポーツ環境調査によりデータを得ながらも、スポーツ教室のプログラムに関する具体的な検討を行われないまま来てしまっていた。そこで、2014年度のスポーツ教室を開講するにあたり、参加者のニーズを反映させたプログラムを取り入れた内容に改訂するための検討を行った。

スポーツ教室参加者アンケートと伊勢原市スポーツ環境調査の結果から

毎回のスポーツ教室開催時には、参加者の満足度がより高いスポーツ教室を開催するために、参加者アンケートを行っている。参加者アンケートは、「子どものスポーツライフ・データ（4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書：笹川スポーツ財団 2012）」を参考に作成し、スポーツ教室に同行した保護者を対象に、①参加者および記入者の属性、②子どもとの運動実施状況、③子どもがスポーツをすることに期待すること、④子どもに新たに取り組んで欲しいスポーツの有無、⑤子どもの体力や運動・スポーツ・運動遊びに対するイメージ、⑥子どものスポーツ活動にする支出、⑦子どもに参加させてみたいと思うスポーツイベントについて質問した。

図1は、2013年度にサッカー教室（8月および10月実施）とフットサル教室（5月実施）に参加した小学生の保護者延べ77名（男性36名、女性41名）を対象に、「お子様に、今後、参加させてみたいと思うスポーツイベント（複数回答可）」について質問したアンケートの結果である。保護者が考える子どもに参加させたいスポー

ツイベントとして最も回答が多かったのは、「技術の向上を目的とした専門的なスポーツ教室やイベント」であった。この結果から、単発的なスポーツ教室への参加動機が、新しい情報や技術を得たいという期待値が高いこと、さらには、これまでのスポーツ教室のように開催側が企画した内容を参加して初めて知るのではなく、教室の目的や目標を事前に参加者に伝え、参加者側も目的や目標をより明確にして参加することを希望しているものと考えた。

筆者らは、2011年に市内の公立小学校に子どもを通わせている保護者を対象に、スポーツ環境調査（<http://smrc.mi.sanno.ac.jp/smrc/magazine/isehara2012/top.html>）を実施しているが、その結果によると「子どもに参加させたいスポーツイベント」として最も回答が多かったのが「はじめてやる人を対象としたスポーツ教室やイベント」であった（図2）。また、「スポーツイベントに参加しなかった理由」を聞くと、「参加するきっかけや機会がないから」という回答が最も多かった（図3）。さらに、「今、行っているスポーツ」として、サッカー（233名）は水泳（235名）に次いで2番目に多かったにも関わらず、「今後やりたいと思うスポーツ」として、さらに57名の児童が希望していた。この結果から、伊勢原市内の小学生には、サッカーを始めてみたい、習ってみたいという希望がありながらも、初心者対象のサッカー教室に参加する機会に恵まれずにその思いを実現できないでいる現状があることが窺えた。

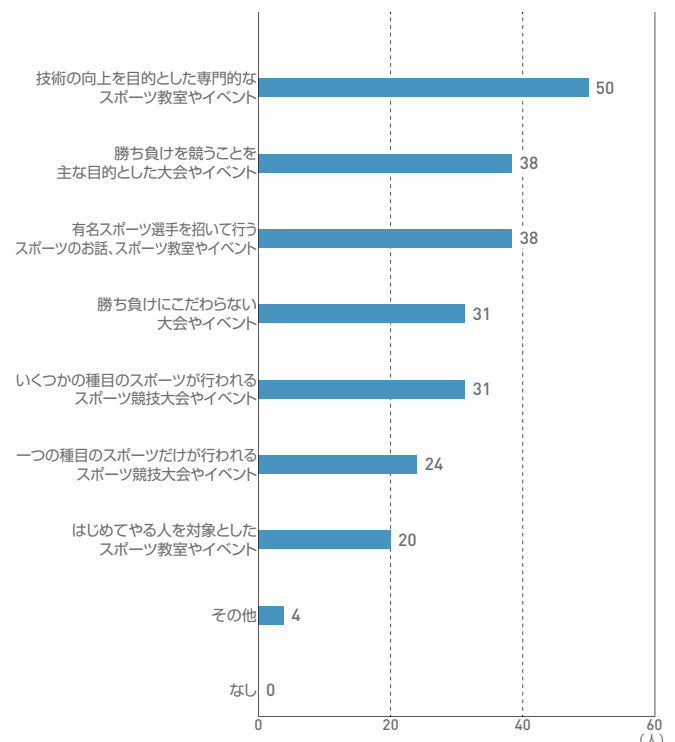


図1. 子どもに参加させてみたいスポーツイベント（スポーツ教室参加者アンケート）

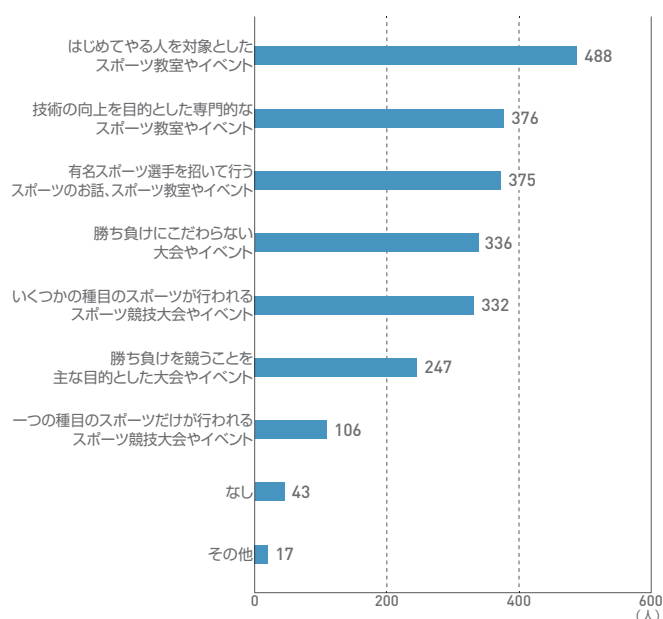


図2. 子どもに参加させたいスポーツイベント(伊勢原市スポーツ環境調査)

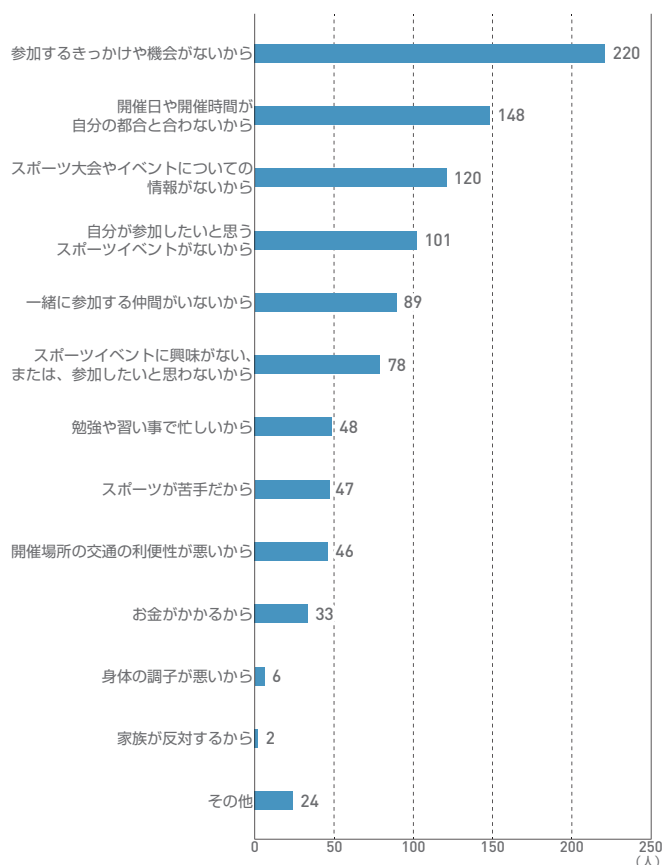


図3. スポーツイベントに参加しなかった理由(伊勢原市スポーツ環境調査)

新プログラムの導入

そこで、2014年度からは、スポーツ教室のプログラムに、新たに初心者の小学生を対象としたサッカークリニックを導入した(表1)。このプログラムの特徴は、各回のスポーツ教室の目的を技術別に明示した点である。そして4回連続のコースとして実施することで、確実にサッカーの基本を習得してもらおうとした点である。

また、初心者は個人での参加が多いことが予想されるため、心理的障壁を和らげるためにも親子での参加も可能にした。

表1. 2014年度スポーツ教室年間計画

開催日	内容 担当	時間帯 場所	対象	募集方法
5月25日(日)	初心者サッカークリニック① ドリブル ベルマーレアカデミー 普及コーチ	9:30～11:30 第1G	小学生 (希望者は保護者も参加可)	一般募集。全4回のコースとして実施(単発での参加も可)
6月22日(日)	初心者サッカークリニック② パス ベルマーレアカデミー 普及コーチ			
7月27日(日)	初心者サッカークリニック③ シュート ベルマーレアカデミー 普及コーチ			
8月24日(日)	初心者サッカークリニック④ ゲームテクニック ベルマーレアカデミー 普及コーチ			
9月7日(日)	かけっこ教室 フィットネス&コンディショニング 竹江氏	9:30～11:30 第1G	小学生	一般募集
10月4日(土)	ビーチバレー教室 ベルマーレビーチバレーチーム 川合氏	9:30～11:30 ビーチバレーコート	小・中学生	チーム募集 & 一般募集
11月平日	サッカー教室 ベルマーレアカデミー 普及コーチ	平日午前中 第2G	幼稚園	園単位で募集
12月20日(土)	バレーボール教室 ベルマーレビーチバレーチーム 川合氏	9:30～11:30 体育館	小・中学生	チーム募集 & 一般募集
1月24日(土)	フットサル教室 ベルマーレフットサルクラブ	9:30～11:30 体育館	小学生	一般募集
2月7日(土)	健康づくり教室 ベルマーレトライアスロンチーム	9:30～11:30 第1G・体育館	制限なし	一般募集
3月14日(土)	バレーボール教室 ベルマーレビーチバレーチーム 川合氏	9:30～11:30 体育館	小・中学生	チーム募集 & 一般募集

今後に向けて

今回のプログラム改訂では、これまでに本研究所にて蓄積したデータを活用し、参加者のニーズに沿うようなプログラムを提供することを試みた。これまでは、6年前に手探り状態から始めたスポーツ教室であったこともあり、主催者側の持つ人的資源等を鑑み、主催者側の事情で企画したプログラムを提供してきた。それに対して今回は、マーケティングの観点から、参加者の期待に応える形でプログラムを加えるという、プログラム改訂にとどまらない、新たなスポーツ教室運営に対する試みを実践すると言えよう。そして、この試みに付随して、スポーツ教室に対する広報の方法や参加者への配慮、もしくはスポーツ教室参加後のフォローなど、新たに取り組まなくてはならないことが生じることも予想できる。新たなプログラム導入がスポーツ教室運営へ及ぼす影響については、次年度以降報告する予定である。

参考文献

- 伊勢原市スポーツ環境調査結果報告書 産業能率大学スポーツマネジメント研究所 2012年10月 (<http://smrc.mi.sanno.ac.jp/smrc/magazine/isehara2012/top.html>)
- 地域を変えるスポーツ資源—地域スポーツと大学・企業 Sports Japan 6:8-20 (2013) 公益財団法人 日本体育協会
- 子どものスポーツライフ・データ (4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書) 笹川スポーツ財団 2012

「ブレイク予想」と「タレント発掘」への挑戦

ースポーツ分野におけるデータマイニングの可能性と課題ー

情報マネジメント学部 准教授 **小野田 哲弥**

ソーシャルメディアの普及により、ビッグデータ時代が本格的に到来した。一般の人々が提供するデータの集積が「集合知」として我々に多大な恩恵をもたらしていることは、災害時の twitter のみならず、Wikipedia、ウェザーニュースなど、枚挙に暇がない。

本研究は THE WISDOM OF CROWDS^{*1}（邦題『「みんなの意見」は案外正しい』）の発想をスポーツ分野、とりわけ「知られざる有望選手の発掘」に応用したものである。まだ発展途上の試みではあるが、その可能性と課題について、2つの事例をもとに報告する。

ソチ五輪日本代表選手の「ブレイク予想」

一つ目の事例は、ソチ冬季オリンピック（2014年2月7日～2月23日）の開催前に公表した代表選手の「ブレイク予想」である^{*2}。この予想ランキングは、2014年1月28日から2月3日にかけてインターネットによって実施した、全国2万人の回答に基づいて算出している^{*3}。

ブレイク予想値の算出は日本代表全113選手を対象に行った。その算出式は「(A) 認知者内でのメダル予想率 - (B) 知名度」である。(A) の分子は金銀銅のメダル予想者の合計数であるが、分母は「その選手を知っている人数」であるため、一般的に知名度が低い選手であっても「知る人ぞ知る有望選手」であれば高い値となる。また (B) の値を差し引くことにより、知名度がもともと高い選手は「ブレイク」の対象から除外される。

このブレイク予想値ランキングをトップ10まで、ソチ五輪における実際の順位を付記して示したものが表1である。この中で実際にメダリストとなったのは第5位の平野歩夢選手だけであり、この結果を見る限り、今回のデータマイニングは失敗したかに見える。

しかし、算出方法にもう一つの条件「知名度が1%以上に限る」を加えることによって、その的中率が大幅にアップすることが表2から見て取れよう。つまり、「2万人中200人以上が知っている選手」に限定することにより、データが安定し信頼性が向上するのだ。

表1. ブレイク予想値（知名度制限なし）トップ10

順位	選手名	競技種目名 (複数の場合は最高位)	知名度		メダル予想					ブレイク予想値 (A) - (B)	結果 (最高位)
			認知人数	(B) 率	金	銀	銅	計	(A) 率		
1	角野友基	スノーボード (男子スロープスタイル)	490	2.45%	109	91	54	254	51.8%	49.4%	8位入賞
2	堀珠花	アイスホッケー (女子)	57	0.29%	11	2	8	21	36.8%	36.6%	全敗
3	竹内愛奈	アイスホッケー (女子)	79	0.40%	14	7	8	29	36.7%	36.3%	全敗
4	近藤太郎	スピードスケート (男子1500m)	72	0.36%	13	5	8	26	36.1%	35.8%	31位
5	平野歩夢	スノーボード (男子ハーフパイプ)	1,441	7.21%	221	218	168	607	42.1%	34.9%	銀メダル
6	中興梓	アイスホッケー (女子)	85	0.43%	13	8	9	30	35.3%	34.9%	全敗
7	鈴木李奈	バイアスロン (女子スプリント)	69	0.35%	8	10	6	24	34.8%	34.4%	80位
8	山根朋恵	アイスホッケー (女子)	59	0.30%	11	5	4	20	33.9%	33.6%	全敗
9	小室希	ボブスレー (女子スケルトン)	58	0.29%	12	5	2	19	32.8%	32.5%	18位
10	獅子内美帆	アイスホッケー (女子)	46	0.23%	8	4	3	15	32.6%	32.4%	全敗

表2. ブレイク予想値（知名度1%以上の選手限定）トップ10

順位	選手名	競技種目名 (複数の場合は最高位)	知名度		メダル予想					ブレイク予想値 (A) - (B)	結果 (最高位)
			認知人数	(B) 率	金	銀	銅	計	(A) 率		
1	角野友基	スノーボード (男子スロープスタイル)	490	2.45%	109	91	54	254	51.8%	49.4%	8位入賞
2	平野歩夢	スノーボード (男子ハーフパイプ)	1,441	7.21%	221	218	168	607	42.1%	34.9%	銀メダル
3	平岡卓	スノーボード (男子ハーフパイプ)	598	2.99%	66	69	71	206	34.4%	31.5%	銅メダル
4	青野令	スノーボード (男子ハーフパイプ)	726	3.63%	67	77	76	220	30.3%	26.7%	37位
5	渡部暁斗	ノルディック複合 (ノーマルヒル個人)	2,379	11.90%	125	252	486	863	36.3%	24.4%	銀メダル
6	菊池彩花	スピードスケート (女子チームパシュート)	275	1.38%	24	14	30	68	24.7%	23.4%	4位入賞
7	吉田知那美	カーリング (女子)	578	2.89%	33	29	89	151	26.1%	23.2%	5位入賞
8	苫米地美智子	カーリング (女子)	954	4.77%	53	56	153	262	27.5%	22.7%	5位入賞
9	加藤条治	スピードスケート (男子500m)	7,063	35.32%	1,372	1,436	1,201	4,009	56.8%	21.4%	5位入賞
10	伊藤亜由子	ショートトラック (女子リレー3000m)	222	1.11%	22	8	20	50	22.5%	21.4%	5位入賞
(参考) 11	竹内智香	スノーボード (女子パラレル大回転)	317	1.59%	14	22	31	67	21.1%	19.6%	銀メダル

本研究所が主体となって実施したオリンピック関連調査は、2008年夏季の北京オリンピックに始まり、2010年冬季のバンクーバー、2012年夏季のロンドン、そして今回のソチで4度目を数える。これまでは純粋な“事実”のみを結果として公表していたが、今回は初めて“予測”という無謀ともいえるチャレンジを行った。その結果は上述のように反省点の多いものとなったが、改善の糸口が見つかったことは大きな収穫である。2016年夏季のリオデジャネイロ、2018年冬季の平昌（ピョンチャン）と改良を重ね、予測精度の向上を目指していきたい。

春高バレー調査からの「タレント発掘」

二つ目の事例は、「女子ビーチバレーの“金の卵”発掘」を意図して実施した、高校女子バレーボールの強豪校に関する調査である。この調査もインターネットを利用し、2014年3月7日から3月15日にかけて、全国1万人を対象に実施した^{※4}。

回答者がわかりやすいように「来年の春高バレー^{※5}出場校予想」と題し、居住地の代表候補を3校まで挙げてもらった。「※順当な高校に加え、“台風”目となりそうな高校も、ぜひお考えください」と注記し、その理由として表3の20項目の中から該当する項目にチェックを入れてもらった。

この結果の活用法について、「北海道」の結果（表4）を例に説明する。多くの票が集まる上位校はインドアの名門校であり、有望な選手が多く所属するが、進路となる強豪大学／実業団とのパイプが太いため、ビーチバレーに転向を促すのは容易ではない。しかし下位の高校ではその縛りが弱く、またチームとしては中堅にとどまるものの、突出した能力を有する個人選手が存在する可能性があり、彼女たちならば本学的女子ビーチバレー部に“一本釣り”できなくもない。

個人情報保護の観点から個人名までは聞いていないが、例示した北海道同様、47都道府県において同様の構造を得ることに成功している。この情報を効果的に活用すれば、現地の大会に赴かずに「地方の埋もれた有望選手」をスカウトできる可能性がある。また汎用性も高く、「甲子園とは無縁の有望高校球児を発見する」等、他のスポーツへの応用も期待できよう。

表4. 春高バレー2015女子北海道代表校予想

順位	高校名	票数
1	札幌大谷	27
	札幌山の手	27
3	旭川実業	21
4	東海大四	7
5	帯広南商業	3
	とわの森三愛	3
7	札幌新川	1
	札幌北斗	1
	札幌南	1
	七飯	1
	野幌	1
	函館大学附属柏稜	1
	北星学園大学付属	1

表3. 春高バレー2015の女子都道府県代表候補に挙げた理由

伝統・環境面	選手・技術面
- 伝統校だから - 近年代表に選ばれているから - 最近強化に力を入れているから - 設備等の環境が良いから - 部員人数が多いから	- チームワークが良いから - サーブが上手いから - レシーブが上手いから - トスが上手いから - スパイクが上手いから - ブロックが上手いから - 抜群に技術の高い選手がいるから - 抜群に高身長選手がいるから
練習・采配面	その他
- 練習が厳しいから - 生徒の自主性に任せているから - 監督にカリスマ性があるから - 監督の采配が優れているから - 戦術がユニークだから	- その他 + 自由記述 - 理由は特にない／わからない

かつてないスカウティング手法



川合 庶

日本ビーチバレー連盟 副理事長
湘南ベルマーレ ビーチバレーチーム
ゼネラルマネージャー
産業能率大学 女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ

「春高バレー調査」のフレームワークの背景には、本学女子ビーチバレー部における石田アンジェラの成功がある。

JBV ツアーアワード2013において MVP に輝いた彼女だが、出身校自体は強豪校ではなく、上位校が対戦する際に「審判」を割り振られる下位校であった。都大会決勝で彼女が審判をしておらず、その長身に目が留まらなかったら、私が彼女に声をかけることもなかっただろう。

この経験が示すように、チームとしての総合力は低くとも、抜群の才能を有する個人選手は少なからず存在する。しかし、すべての地方大会にまで足を運ぶことは不可能であるし、知人を通じて得られる情報にも限界がある。

広範な社会調査をもとに「隠れた“金の卵”」の目星を付けることができるこの手法は、これまでになく画期的なアイディアであり、本学女子ビーチバレー部のスカウト活動に大いに活用していきたい。

※1 James Surowiecki (2004), Random House, Inc. 邦訳版は小高尚子 (2006), 角川書店。

※2 「ソチ五輪の選手と競技に関する調査（五輪開催前速報）」, 2014年2月4日, 産業能率大学スポーツマネジメント研究所, http://www.sanno.ac.jp/research/gorin2014_1.html

※3 ソチ五輪事前調査の回答者2万人の構成は、20代・30代・40代・50代・60代それぞれ4,000人ずつの男女同数である。

※4 春高バレー調査に際しては、あらかじめスクリーニングを行っている。具体的には同世代の高校生男女、高校生の母親である確率の高い136～55歳女性、および、高校時代にバレーボール部に所属していた人々から成る1万人である。

※5 「春高バレー」は愛称であり、正式な大会名は「全日本バレーボール高等学校選手権大会」である。

08

マネジメントの礎を —大山登攀競技大会—

文責：スポーツマネジメント研究所 編集部

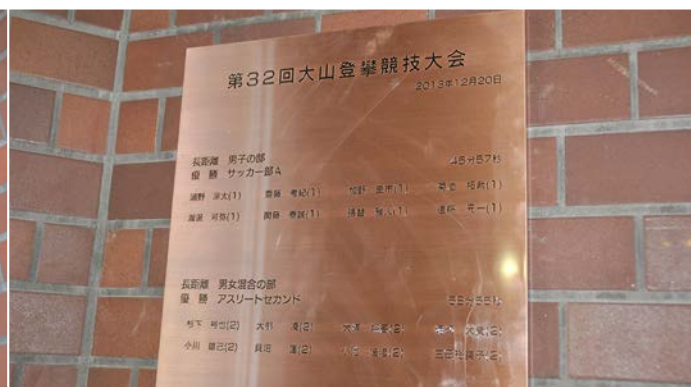
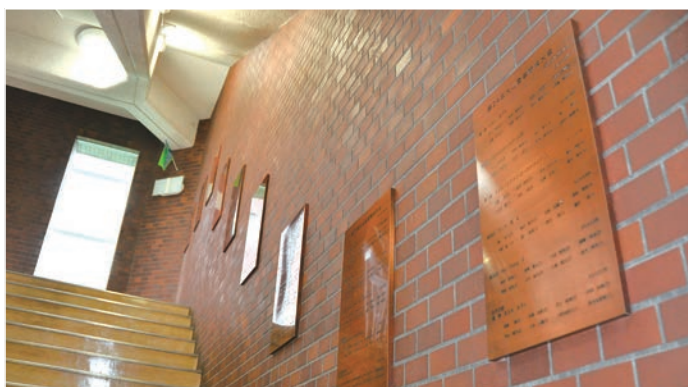


天候に恵まれた第32回開会式。
選手184名、スタッフを合わせて265名の学生が参加しました。

産業能率大学の開設、経営情報学部と共に誕生し大山の麓に位置する湘南キャンパス。1号館中央階段に掛けられている銅板には、在校生がスポーツとマネジメントに取り組んだ証と、産業能率大学の伝統が刻まれています。そして、2013年12月21日、32枚目の銅板に新たな歴史を刻む「大山登攀競技大会」が開催されました。

2013年に32回目を迎えた「大山登攀競技大会」(以下大山登攀)は、在校生3学年が揃った1982年12月20日に第1回目を迎えました。大学をスタート地点に、ゴールとなる大山阿夫利神社下社までの約5.7キロ全て上り坂の道のりを、3学年にまたがった10名1組で構成するチームによって一斉にゴールを目指す、という駅伝とも違う少し変わったルール^{※1}。「ほんとに全て上り坂。怪我も事故

もなく32回目を終えられたこと、そして何より学が主体となって、選手もスタッフも一丸となって運営できていることが、本当に嬉しいこと。」そう語るのは、学生部長を務めた経験のある原田学長^{※1}。毎日朝晩の練習を欠かさない現役のサッカー部員でさえ厳しい表情を隠せない大山登攀ですが、毎年200名近い学生が選手として参加、そして運営に携わっています。



開催記録を残す銅板には、
毎年上位記録と選手名が刻まれます。

大学を出発し、ゴールとなる大山阿夫利神社下社までの途中地点。
この後約2キロの足場の悪い坂道が続きます。

表 1. 大山登攀競技大会ルール（2013 年現在）

チーム構成	男性・女性・混合チーム計 8 名構成とする
長距離コース①	スタート：産業能率大学 湘南キャンパス ゴール：大山阿夫利神社下社 行程：約 6.4 キロ
短距離コース②	スタート：産業能率大学 湘南キャンパス ゴール：(中間点) リゾート鈴川駐車場 行程：約 4 キロ

表 2. 大山登攀競技大会 参加チーム数

部門		2013 年 (第 32 回)	2012 年 (第 31 回)	2011 年 (第 30 回)
男子	長距離	9 チーム 72 名	9 チーム 72 名	11 チーム 88 名
	短距離	1 チーム 8 名	1 チーム 8 名	—
女子	長距離	—	2 チーム 16 名	—
	短距離	1 チーム 8 名	—	—
混合	長距離	8 チーム 64 名	4 チーム 32 名	—
	短距離	4 チーム 32 名	7 チーム 56 名	8 チーム 64 名

1979年に単科大学としてのスタートを切った本学にとって、学園祭をはじめとするイベントは開設時より学生だけでなく教職員も一体となって築く中、大山登攀は「より一層チームワークを体感できるイベント」として、当時の学生部長の提案により企画されました。体力づくりの競技大会にしては厳しすぎる行程に加え、学年をまたがり一斉にゴールしなければならないというユニークなルールには、マネジメントとチームワークを学んでほしいという狙いがありました。

メンバー全員でゴールするためには、リーダーシップとチームワーク、そして何よりメンバーの協力が不可欠です。全工程の中でも大山寺付近のコースは歩くだけでも足に張りを覚える急勾配。加



走者が走りやすいように、スタッフによるルートの落ち葉清掃。これも伝統行事です。



2013年 元気良くスタートを切り無事にゴール

えて不規則な石畳を走る学生に、全員でゴールするためのペース配分や余裕などあるのかと不思議に思うのは自然なことですが、大会当日に中継ポイントで目に映るのは、意外にも冷静に目の前の課題に取り組む学生たちの姿。途中息も絶え絶えに歩いてしまう一人にペースを合わせる他のメンバーの姿、無理にペースを保とうとする人が居れば先の行程を考えて無理をするなどアドバイスする人、「ゴールしたら焼肉！」とメンバー同士で声を掛け合う姿は、マネジメントそのもの。チームそれぞれ、参加者一人ひとりの能力やキャラクター、コースのポイントそれぞれで異なる制約条件が折り重なる中、ベストに近づくためのプロセスを垣間見ることができるのです。何より過酷な状況におかれているからなのか、それともスポーツの力なのか、チームそれぞれにドラマがあります。

そして、それは選手だけではなく、大会を運営するスタッフも同様。大山登攀は第1回目よりこれも伝統として、学生が実行委員会を形成・運営に携わっています。当日の運営はもちろんですが、コースや中継ポイントの事前確認や清掃をはじめ、実行委員が全面的にかかわっています。近隣住民の方々や大山登山客の皆さんから「頑張ってる」と声を掛けて頂けるのも、必死に頑張る選手の姿と、インカムを片手に状況確認し合いながら走者を確認し、見送るスタッフの真摯な姿を見ることが出来るからかもしれません。

「一般道を利用したイベントで近隣の方々の理解と協力無くしては開催も難しかった。でも、困難を乗り越えた学生の表情は何物にも変えられなくて。実際の問題に向き合い、仲間と感情を共有すると一皮も二皮も違った成長があるんですよ。」と語る原田学長。大山登攀競技大会を通じたマネジメントの礎を、大事なものを繋ぎ紡いでいって欲しいという思いは、スポーツを通じたマネジメントの実践と伝統として、第33回大会に向けてあゆみ出しています。

※1 産業能率大学 学長 原田雅嗣（2014年3月末まで）

研究員紹介

Staff

■ 研究所長



宮内 ミナミ

産業能率大学
学長 / 教授

■ 研究員



中川 直樹

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



渡邊 隆嗣

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



小野田 哲弥

産業能率大学
情報マネジメント学部 准教授

■ 研究員



木村 剛

産業能率大学
経営学部 准教授

■ 客員研究員



川合 俊一

日本バレーボール協会
強化事業本部 副本部長
俄ケイ・プロス代表

■ 客員研究員



川合 庶

産業能率大学
女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



水谷 尚人

㈱ SEA Global 代表取締役
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任講師

■ 客員研究員



西野 努

㈱ SEA Global 取締役
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



中島 靖弘

NPO 法人湘南ベルマーレスポーツ
クラブ トライアスロンチーム
ヘッドコーチ

■ 客員研究員



廣田 和生

横浜ビー・コルセアーズ 代表



※研究員肩書きは2014年4月1日現在のものです

編集後記

スポーツが我々に与えてくれる物は何だろう？ と最近よく考えますが、定期的なスポーツ・運動実践は清々しさを与えてくれています。この清々しさをより多くの人に体験していただき、充実した生き方の手助けが出来ればと思います。更なる飛躍を目指して努力したいと思っています。(w)

サッカー部も女子ビーチバレー部も2014年に新しい選手を迎え、それぞれのメインシーズンに向けて動き出しました。選手の生き生きとした表情をぜひ試合会場で見たいと思います。今年も精一杯頑張る選手達の応援をよろしくお願い致します！(a)

湘南ベルマーレと提携して10年、サッカー強化・育成に着手して8年、サッカー部は関東2部リーグへの昇格を果たし、2014年度から新たなステージで戦います。目標に向かって課題に取り組み、切磋琢磨してほしいと期待しています。これからも、スポーツを通じた人の成長を支援していきたいと思っています。(M)

5月末でプロバスケットbjリーグのシーズンは終わります。bjリーグで顕著なのは、大都市圏での観客数が芳しくないことです。東京、京都、横浜、福岡などの観客数はリーグでも下位に低迷しています。大都市だからこそ、様々な娯楽があり、他のエンタテインメントとの競合も激しいのでしょう。何とかしたいものです。(K)

まもなくブラジルW杯が開幕します。日本代表の快進撃を期待しつつ、学生たちの受講への影響が若干不安な今日この頃…。本研究所では、今回初めてサッカーのW杯に対しても大規模なネット調査を実施します。4度にわたる五輪調査のノウハウを活かし、興味深い結果をお届けできればと思っています。ご期待ください。(O)

東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を契機に、国民のスポーツリテラシーを高めようという声が、多方面から聞かれるようになりました。成熟したスポーツ文化をつくり上げるために、本研究の成果が多少なりとも貢献できるよう、今後も活動していきたいと思っています。(N)

SANNO SPORTS MANAGEMENT

Vol.06

Editor in Chief

宮内 ミナミ Minami MIYAUCHI

Editorial Staff

渡邉 隆嗣	Takashi WATANABE
中川 直樹	Naoki NAKAGAWA
木村 剛	Tsuyoshi KIMURA
小野田 哲弥	Tetsuya ONODA
長瀬 綾乃	Ayano NAGASE

Special Thanks

原田 雅顕 Masaaki HARADA

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.06

2014 年（平成 26 年）5 月発行

< 編集 / 発行 >

産業能率大学 スポーツマネジメント研究所
〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573
TEL:0463(92)2211

©The SANNO Institute of Management. All rights reserved.

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN



Issues for Future Development